

ばあちゃんの庭

大塚 遥香 静岡県静岡市 三十一歳

ばあちゃんの家に行くと、いつも庭にいった。ネギ、南天、菊。種類もばらばらなものが植えてある。庭石にはキラキラした鉱物みたいなものが無造作に置いてある。石でできたカエルの置物まで、ちよこんと座している。

ばあちゃんの庭は、いつもごちゃごちゃして、色んなものが混在していて、最高に楽しいところだった。今日は何が見つかるんだろう。ばあちゃんは、私が庭の土をほじくり返そうが、どこからか花を持ってきて勝手に植えようが、何も言わなかった。

社会人になり、毎日を過ごす中で、「こうあるべき」「普通は」という言葉が増えた。就活するときには黒のスーツを着て、みんながほぼ同じことを言う。ルールや秩序が何よりも優先されなければならない。

いつの間にか自分も目立つことや、他人と違うことを避けるようになった。

そんなとき、ふと、ばあちゃんの庭を思い出す。

なんでもあって、ごちゃごちゃしていて、最高に、楽しかった庭。

もう少し。もう少し肩の力を抜いて、自由にしてもいいんじゃないか。

ふと息苦しくなったとき、あらゆるものが無造作に、しかしとても生き生きとしたあの庭と、ばあちゃん的笑顔を思い出すと、私の心もまた、ふっとやわらかくなるのである。